

公益財団法人 立松財団 御中
様式 2021A1,A2,B

2025 年 8 月 31 日

所属: 名古屋大学

氏名: 三森 弘



2023 年度 助成

研究 終了 報告書

※ゴシック文字で記入下さい。

研究テーマ	震災復興・原発避難地域における住民目線からみた空き家再生方法論の構築
研究の結果	研究1:震災後の復興拠点区域における建物利用と住民居住動向 研究1では、町域全体が避難対象となった全国でも特異な被災地である双葉町を対象に、震災後の復興過程における建物更新・空家率・住民属性の地理的偏在に注目し、現地調査を行った。これから、双葉町の復興は JR 双葉駅を中心としたコンパクトな都市機能の再構築が進行する一方で、周辺地域における空家化の深刻化が明らかになった。特に新築建物の非空家率の高さは、新たな居住環境の整備が居住者の誘致に一定の効果をもたらしていることを明らかにした。 またアンケート調査の結果を用い、住民属性に注目し分析した結果、震災前から居住する「継続居住者」や「避難者」は双葉近郊に多く、震災後に新たに流入した「移住者」は双葉中心部に集中し、それぞれ居住形態や年齢層に特徴が見られた。 これから、今後の復興においては、復興フェーズが「整備」から「選択的な活用と撤退」へと移行しつつある現在、持続可能な都市構造を構築するためには、①既成市街地における面的な住環境整備と、②余剰ストックの用途転換または段階的な撤退計画の策定という両軸を統合的に推進する復興戦略が求められることを指摘した。 その他、避難解除時期を考慮して前述の双葉町のほか、檜葉町、南相馬市小高区において、震災当時存立した建物の変容を全戸調査(2937戸)に行い、2520戸の除却を確認した。その内、現存する建物については空き家の抽出・建物の劣化状況を調査した。 研究2:マズローの欲求段階説に基づく震災避難者の心理構造の把握 研究2では、東日本大震災から13年を経た避難者へのインタビューを分析対象とし、マズローの欲求段階説を用いて、避難者の課題と復興に向けた心理構造を明らかにすることで、個々の状況に応じた効果的な支援のあり方を考察した。

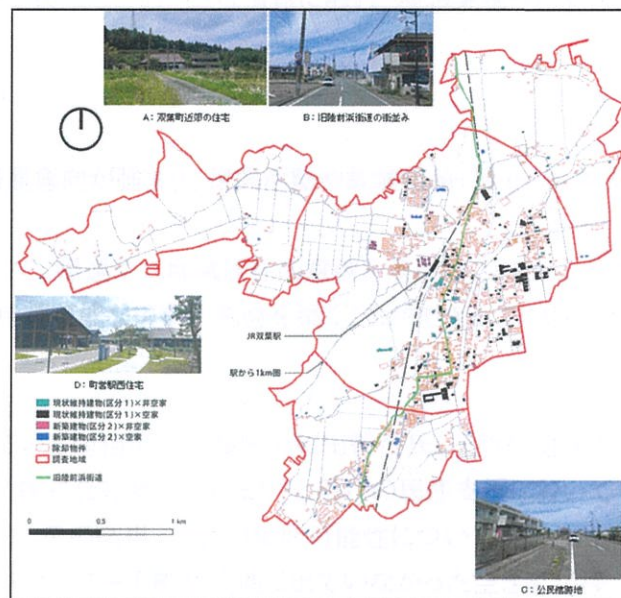


図1 双葉町 帰還困難区域にみる復興状況

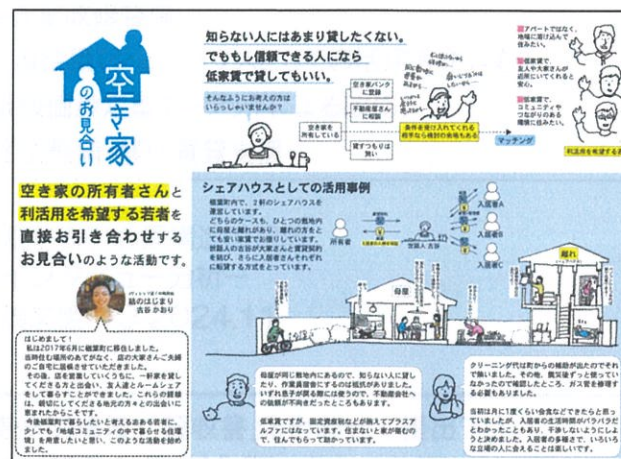


図2 檜葉町での検討事例「空家家のお見合い」

	「欲求段階説」は人間の基本的な欲求が段階的に進化していくという理論であり、基本的な生理的欲求や安全欲求から始まり、より高次の欲求である社会的欲求、尊厳の欲求、そして自己実現の欲求までの段階的なニーズが明確になる。本研究は、この理論を被災地の都市計画に応用することで、住民の多様なニーズに対応し、復興過程におけるモチベーションと自発性を引き出すことが可能になると考えた。 これから、避難住民の困難は主に生理的・安全欲求に関わるが、コミュニケーション課題は上位の所属・承認欲求に関連していた。また、所属と愛の欲求を基盤に自己実現へ向かう傾向や、欲求の高度化とともに他者指向性が増す傾向が確認された。 さらに、避難住民のペルソナの設定を試みた結果、「理想」「課題把握の複雑化」への意識が上がるにつれて、マズローの欲求段階も上昇するという傾向が見られた。初期は帰還を当然視 → 中期は現地での生活維持重視 → 後期は現状維持と復興意欲が交錯しつつ、積極的関与へと移行していくモデルが確認できた。具体的には下記の段階を得ていた。 避難者ペルソナによる前向き化プロセス ①生理的欲求段階：避難当初の生活者 状態：避難先を一時的と捉え、帰還を前提に日々を過ごす。 変化契機：避難長期化により、帰還の困難さを自覚し始める。 ②安全欲求段階：生活安定志向者 状態：課題の複雑化を認識し、帰還困難を前提に現住地での生活維持・整備を志向。 変化契機：生活基盤整備の必要性を優先的に理解。 ③所属・愛～承認～自己実現欲求段階：地域との関係性を再構築する住民 状態：厳しい現状を把握しつつ、復興や支援策など前向きな情報に触れ、理想実現への意識が高まる。 特徴：帰還希望と現状維持の間で葛藤。 ④自己超越欲求段階：復興関与志向者 状態：課題の複雑さを理解した上で、帰還意向が強まり、復興活動や故郷維持（墓守、家族支援等）への積極関心を持つ。 以上の考察から、こうした段階的支援を通じて、帰還や二地域居住の意欲を高めることで、ふるさと空き家再生や地域資源の活用につなげ、持続可能な復興の基盤を築くことができることを指摘した。 研究3：被災地における空き家再生方法論の検討 上記の研究をふまえ、移住者支援にあたっている南相馬市小高区の和田智行氏（一般社団法人パイオニズム）、並びに楡葉町の古谷かおり氏（株式会社結のはじまり）と現状の居住支援において求められている施策について意見交換を行った。その結果、下記の実施可能性について検討した。 1) 出張！よろず空き家相談・住まい探しスナック→不動産流通に出ていなかった空き家が移住者のためのシェアハウスとして活用（図2） 2) 公的機関の期間限定借り上げによる空き家改修整備 3) 廃業した旅館や撤退した作業員宿舎の再活用（シェアハウスとしての活用等を含む） 4) 企画型空き家斡旋改修事業（空き家版残価設定型クレジットによる改修） 5) 空き地を活用したコンテナ設置による住宅整備・移住賃貸支援
研究発表 (実績)	執筆者名：三森弘 平子 真帆 論文題目：マズローの欲求段階説に基づく避難者の心理構造の把握 ー福島原発事故から13年後のインタビュー分析ー 掲載誌名：日本建築学会住宅系研究報告会論文集-19 2024.11

提出期限：研究期間終了後、すみやかに助成金の「必要経費使途明細書」「領収書」と合わせて提出下さい。
年度をまたぐ場合は毎年3月末日までに、途中経過をご記入の上、報告願います。